

域社会と歴史意識一』、名古屋大学出版会、415頁。

金沢市史編さん委員会編：『金沢市史資料編18 絵図・地図』

金沢市 1999年3月 本文（含む絵図・地図48枚）136頁 別刷絵図・地図26枚 7,000円

周知のように金沢には、矢守一彦らの研究によって貴重かつ重要な絵図が多数あることは広く知られていたが、大型のものが多いために一般の目に触れることはあまりなかった。それが、『金沢市史』の絵図・地図編によって、74点にも及ぶ美しい絵図が手軽に見られるようになったという朗報が届いた。金沢から送られてきた本書を開くと、加賀国絵図や金沢城下町絵図などが26点も大きく別刷にされており、期待通りの魅力と迫力に圧倒された。また、これだけ多くの貴重な絵図を鮮明な写真で収録しながら安価な点にも驚いた。まずは、日本有数の絵図の宝庫を開かれた金沢市史の関係者の英断と努力に対し、敬意を表したい。

さて、本書の構成は、総説に始まり、1 国絵図、2 郡図、3 城下町図、4 金沢城図、5 町並み図、6 寺社・屋敷図、7 城下周辺図、8 河川・用水図、9 街道・道中図、10 近代以降の金沢図と分類し、それぞれを編年配列して最後に掲載絵図・地図の一覧を載せている。

1 は、加賀国の幕府撰の江戸初期図をはじめ正保と元禄図、藩撰の延宝図、加賀藩を代表する測量家の石黒信由が作成した加賀四郡組分絵図と加越能三州郡分略絵図、その孫信之の細密絵図である。また、これらの図形を比較した図は、精度が良くなる過程を一目で理解できる。

2 は、有沢武貞が写させた賀州河北郡図籍と同石川郡図籍、石黒信由の同郡分間絵図と同郡村々組分図である。金沢城下町の位置する石川郡の3種の図を比較できるのは興味深い。1の国絵図との関係も探してみたいと思った。

3～6 は、金沢城下町に関連するものである。これらは、26枚も掲載され全体の3分の1を占め、別刷の半分にあたる13枚が割かれている。金沢の象徴とも言える城下図の収集と資料化にいかにより多くの力が注がれたかがわかる。記載内容もほとんど読むことができ、資料的価値も高い。これらの図を携えて金沢城下町をじっくりと歩きたいと思うのは、私ばかりではあるまい。

3 は、現在最古の金沢図をはじめ、それに続く

加賀国金沢之絵図、ついで藩用図の中で最大の金沢城下図は見応えのある別刷2枚となっている。また、主題図としては、宝暦大火の被害を描いた金沢大火消失域図、町屋のみを描いた金沢町惣絵図がある。測量図では、石黒の金沢町図、遠藤高環や有沢武貞の6枚の城下図がみられる。この他に、明治3年の木版図、城下の氏子域を示した図、幕末の木版図と多彩で、最も楽しく鑑賞できた。

4 は、新発見の最古とされる慶長期の東大図と、これまで慶長図とされた京大本とその系統本がある。また、正保、寛文、宝暦火災前、寛政、文政の各城図が収められる。さらに、二の丸・松・金谷・竹沢・越後の各御殿図もある。これらは、6の寺社・屋敷図とともに建築図面が多く、金沢市史には建築編も発刊されるので、そちらに収録した方がよい図もあったのではなかろうか。

5 は、南町・上堤、宝船寺、川南、三俣・六斗林・地黄煎の各町絵図と、金沢城下の屏風として享保、天保期、江戸後期の3点を掲載している。

周知のように城下町絵図は、武家屋敷は詳細に描かれるが、町人地は地割すら描かないものが少なくない。従って、各町絵図は貴重であるから、一部ではなく読み取れるように大きく掲載して欲しかった。また、美しい屏風は、城下町絵図にない立体的な金沢町の様子を伺わせてくれる。

ところで、これらの金沢城下町絵図の系統分類図が付されているが、これについての解説がみられないのは残念であった。

6 は、加賀八家の一つ前田美作邸図、河野久太郎の作成した御屋敷并御家中毛受之図、前田家菩提寺の天徳院と桃雲寺の図、藩の施設である公事場、御算用場、町会所の図がみられる。

7 は、城下町の港町兼在郷町である宮腰、粟崎、大野の絵図、石川郡海岸の水深を示した図、金石港や新田開発に関する図が載せられている。城下周辺の状況が国絵図や郡図によってしか伺えない本書にとって、これらの図は貴重である。

8 は、河川図として犀川と大野川の航路や治水図、用水図が辰巳と寺津用水図を収める。金沢城下町絵図と比較すれば、金沢の河川の恵みを感じ取ることができるであろう。

9 は、江戸と金沢間を描いた北国海道絵図、從加州金沢至江戸下通山川駅路之図、刊行図の駅路旅鈴、賀武達道路図、金沢江戸道中図、金沢と京都間の街道を描いた賀州至京師兩道置郵図、さら

に金沢城下とその外港宮腰を結んだ宮腰往還図を収めている。ルート図がこれだけ多く作成されたのは、加賀藩の特徴であろうか。

10は、明治9年の木版図、同21・33年の1万分の1地形図、同22年の2万分の金石図、昭和2年の都市計画図、同7年の吉田初三郎の鳥瞰図、昭和22・27年の米軍空中写真、昭和35年の5万分1地形図を収めている。これらは、絵図と現代をつなぐものである。最新の大縮尺図も付していただく有り難かったように思う。

ところで、近年の自治体史は金沢市史のように絵図・地図の資料集が独立した巻として発行されるようになった。そのことは、自治体史の編纂に古地図を専門とする歴史地理学の研究者も関与する機会が増えたことを意味する。現在、評者もある自治体史の絵図・地図編の編集にたずさわっているが、絵図や地図を資料集にどう編集し掲載するか悩んでいる。ここでは、管見した自治体史の絵図・地図編を編集と掲載の視点から分類し、本書の位置づけを検討しておきたい。

まず、なんといっても図の掲載範囲が問題となろう。国絵図のような大型図の場合、自治体の範囲のみを掲載する方法である。これは、図の記載内容を読み取れる反面、図全体の構図が不明であったり、凡例などの部分が掲載されていないこともある。これに対して図全体を掲載する方法がみられる。この場合は、全体が観察できる点はよいが、図版が小さいと文字の判読は難しい。また、両者の欠点を補うものに図全体と自治体の範囲を拡大して載せるものもある。

つぎに、絵図の写真だけを示すものと、絵図と対照する解説図を付す場合がみられる。写真だけの場合は、くずし字の解説能力を習得する必要がある。また、図の文字も大きく鮮明にする必要があり、大型図の場合は限界がみられる。一方、解説図を付す場合は、図をトレースして解説文字を示すものと、トレース図に替えモノクロ写真の上に解説文字を貼る例もみられる。

この他に絵図を本に収めるか、本とは別に一枚刷にするかの問題がある。一枚刷は、図を探すの

に時間がかかるが、図をみながら本の解説を読むことができる。これに対して本にすれば図の検索が容易で、一枚刷にありがちな紛失も防げる。しかし、大型図は分割して掲載するしかなく、絵図の魅力が損なわれる。また、一冊にまとめると図の箇所とは別に解説を載せざるを得ず、絵図を見ながら解説を読むことができない。こうした点を考慮して図と解説を2冊に分けるものもある。

多少長くなったが、以上が自治体史の絵図編にみられる主な掲載方法とその特徴であろう。どれも一長一短があるが、常に問題となるのは大型図の場合である。こうしたなかで、金沢市史では絵図全体を掲載し、大型図の中でも貴重なものを別刷にし、記載内容が読み取れる鮮明な写真とした。また、本の方には小型図を中心に掲載し、参考となる図はモノクロで解説に付している。要するに、金沢市史の掲載の特徴は、それぞれの図に応じた柔軟な方法をとったことであろう。これまで発行された他の自治体史の絵図編は、掲載の統一にこだわりすぎた場合もみられるように思われる。一方、金沢市史は解説図を載せていないので、一般読者には利用に難点があることも事実であろう。

しかし、絵図の魅力はなんといっても図の色彩の美しさや絵画的な描写表現とそのリアルな景観表現にある。まずは、原本に忠実な写真の提供を優先すべきではなかろうか。いずれにしても左記の問題をも含め、自治体史の絵図編の発行状況や調査、編集方法などについて、直接タッチした関係者の議論が必要な時期にきたように思われる。

思いつくままに紹介をこころみた。的外れな点も多いと思うが、お許し願いたい。いうまでもなく、本書によって金沢の絵図が共有の財産となったことによって、図そのものの研究とそれを活用した様々な研究が数段進歩するに違いない。また、本書を一度手にとれば、誰もが絵図の美しさに魅了され、絵図のファンになるであろう。本書は、金沢の地域理解や研究だけでなく、教育での利用や絵図の文化財としての価値の普及などに広く活用の道を秘めている。(磯永 和貴)